

猛暑を乗り切ろう！

夏休み入り、連日、冷房の欠かせない猛暑が続いています。いつの間にか、冷房のある生活に慣れてしまった私達ですが、電気のない江戸時代、人々はどのように夏を過ごしていたのでしょうか？

実は、歴史気候学によれば、江戸時代の日本は総じて寒冷期だったということが分かっています。日本史での学習でご存知のように、江戸時代後半には天明年間や天保年間など、いくつもの大きな飢饉があったことから寒冷期だったことがうかがえます。

しかし、たとえ現在に比べて涼しい夏であったとしても、やはり暑い夏には違いがなかったことと思います。夏を過ごすために、「打ち水」や「金魚の鑑賞」などで庶民は涼しさを味わうよう、知恵を絞っていました。また、意外に思うかも知れませんが、「甘酒を飲むこと」も江戸時代に流行った夏の風情でした。甘酒売りが街を歩いて温かい甘酒を売り歩き、それを飲むことで涼しさを味わったと伝えられています。甘酒売りの姿は浮世絵にも描かれ、一茶や芭蕉の句にも甘酒を詠んだ夏の句があり、それゆえに夏の季語にもなっています。

こうした知恵のひとつに「水うちわ」というものがありました。

「水うちわ」とは、竹の骨組みに雁皮紙(がんびし)とよばれる極薄和紙を貼り、仕上げとしてニス塗りを施して透明感を出したもので、今では岐阜県の伝統工芸品のひとつになっています。この「水うちわ」は、ただ扇ぐのではなく、その名の通り水に浸してから使うものです。水に浸したうちわをパタパタと扇ぐことで気化熱を利用し、涼しさを感じるという工夫が施されています。

「水うちわ」を生み出した岐阜県と言えば、「美濃の手漉き和紙」や「長良川の鶺鴒」など、この地方独自の伝統文化の存在も欠かせません。そもそも「水うちわ」は、鶺鴒い船に乗った客が、川の水で涼をとるために生まれたものと伝えられており、風流を楽しむ近世江戸の人々の知恵が込められていると言えるでしょう。

確かに、熱中症予防には、こまめな水分補給と身体を冷やすこと、風通しを良くすることが欠かせませんが、「水うちわ」のように風流を楽しむ心も残して行きたいものです。わが家でも「水うちわ」を棚から取り出して使いました。

ぜひ皆さんも学習同様、工夫して、この猛暑を乗り切ってください。

